

インドネシア・スンバ島における 世帯と家計の人類学的研究

小 池 誠

はじめに

本稿は、2010年11月～12月に特定個人研究費「変動するインドネシアの農村社会における家族・親族の人類学的研究」により実施したインドネシアにおける調査成果¹⁾の一部を報告するものである²⁾。東ヌサ・トゥンガラ州東スンバ県ハハル郡 (Kecamatan Haharu, Kabupaten Sumba Timur, Propinsi Nusa Tenggara Timur) の二つの行政村カダハン村 (Desa Kadahang) とウンガ村 (Desa Wunga) の合計100世帯を対象として、世帯構成・学歴・職業・移動・収入・支出などに関する世帯調査を実施した。この調査結果にもとづいて、これまで人類学者によるスンバ調査でほとんど取り上げられることがなかった家計の実態を明らかにしたいと考えている。ただし、ここで提示する家計調査のデータは、一般に農村経済学の家計分析³⁾などで使用される統計的に厳密に得られた数値ではなく、スンバ農村における世帯経済の概要を知るための、大まかなデータであることを断っておく。

続いて、社会変動下の農村社会において世帯が危機的な状況に対して用いる生存戦略 (survival strategy) の解明を進めたいと考えている。本稿では、個々の世帯が手持ちの資源 (物的資源だけでなく社会関係も含む) を使って、構成員の福祉のために取る戦略を世帯の生存戦略⁴⁾と呼ぶことにする。「戦略」の概念については詳細な議論が必要であるが、本稿ではブルデュの議論 [ブルデュ 1988 参照] も踏まえて、地域社会の慣習 (スンバ語で *huri*,

1) インドネシア調査は、本学の特定個人研究費とともに、平成22年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 「変動するインドネシアの農村社会における家族・親族の人類学的研究」 (課題番号: 22520837) の援助も受けて実施された。インドネシアの現地調査に関しては、インドネシア科学院 (LIPI) のパチ氏 (Abdul Rachman Patji) の協力を得て、インドネシア政府調査技術局 (RISTEK) の調査許可を取得して実施した。今回のインドネシア調査を可能にした関係諸機関に感謝の意を表したい。

2) 本稿の一部は、2011年3月22日にジャカルタのインドネシア科学院社会文化センター・セミナー (PMB-LIPI) において「Ekonomi Rumah Tangga dan Peranan Jaringan Kerabat dalam Menghadapi Kemiskinan di Masyarakat Sumba Timur, NTT (東ヌサ・トゥンガラ州東スンバ社会の貧困問題における世帯経済と親族ネットワークの役割)」という題目でインドネシア語ですでに発表している。セミナーで得た質問・意見も本稿を書く上で参考にしていく。

3) たとえばパキスタン農村の研究をおこなった Kurosaki [1998] を挙げることができる。

4) 宮内 [2011] はソロモン諸島の研究で「生活戦略」という言葉を使って、民族紛争など社会変動に対する対応を描いている。これは本稿でいう「生存戦略」とほぼ同義である。

キーワード: インドネシア, スンバ, 家族, 生存戦略, 家計

インドネシア語では *adat*⁵⁾) と政治経済的構造の束縛を受けつつも、ある程度の主体性をもった行為を指している。

1 スンバ社会の家族と世帯

1-1 スンバ研究とジャワ研究

人類学における家族と親族の研究では、氏族とリネージ (clan and lineage) という親族集団を対象とした研究が中心的な地位を占め、家族と家内的集団 (family and domestic group) の研究は周辺的な関心しか受けていなかった [Holy 1996: 51]。とくにスンバ島を含む東部インドネシアの諸社会の研究では、家族/世帯の実態を解明しようとする研究は皆無に近い状況であった⁶⁾。1980年代以降の東部インドネシア研究で必読文献の一つであったフォックスの論集 [Fox (ed.) 1980] に収められている諸論文から明らかのように、研究のおもな対象は、親族集団および婚姻と縁組 (marriage and alliance) であった。この点では、同じインドネシアでもジャワ島の農村社会の研究で家族/世帯の研究が大きな比重を占めているのと、好対照をなしている。その違いは、人類学者⁷⁾が東部インドネシア社会の研究をほぼ独占しているのに対し、ジャワ農村の研究は農村社会学の分野から多くの研究成果が発表されているという学問的志向の違いに対応する。その結果、タイとインドネシア・ジャワの農村研究の間には方法論とアプローチの点で共通性が数多く認められるが、同じインドネシア国内とはいえ、ジャワ研究と東部インドネシア研究との間には歴然とした壁があった。

現代のインドネシア・スンバ社会を貧困や開発の問題と結び付けて論じようとする時、ジャワ農村の研究で対象となっている家族/世帯という社会単位に焦点を当てなければ、何もみえてこない。ジャワ農村研究の成果を参考にして、スンバ研究を進めようという筆者の今回の研究は、自身の調査経験とも深く関係している。1985~1988年に東スンバ県の中核村ウンガ (当時の行政単位ではハハル分郡ウンガ村に位置する) で親族 (「家」) と儀礼に関して、おもに質的な調査を実施し、その成果を論文 [たとえば小池 1989, 1990a, 1990b, 1993, 1998, 2009] で発表し、また博士論文にまとめ、『東インドネシアの家社会——スンバの親族と儀礼』 [小池 2005] として公刊した。スンバ調査とは別に、1998~99年にジョクジャカルタ特別区バントゥル県の農村社会を調査を実施し [小池 2003 参照]、さらに2007年から西ジャワ州カラワン県の農村調査を開始した [小池 2010b 参照]。以上のような、東部インドネシアを最初の研究対象に選んだ人類学者としては、少し稀有な調査経験が今回のスンバ調査の背景となっている。

5) 本稿では、スンバ語のみイタリックで表記している。

6) 例外は、本稿で何回か紹介するように、西スンバのラウォンダ (Lawonda) で調査したフェルである [Vel 1994]。

7) 東インドネシア社会を研究する人類学者には、世界観 (cosmology) と社会構造の関心に注目する構造主義の影響が強かった。

1-2 公的領域と家内的領域

現代スンバ社会における家族/世帯という単位的重要性を明らかにするためには、フォーテスという人類学者による政治的・法的領域 (the politico-jural domain) と家内的領域 (the familial, or domestic domain) という区別が参考になる。フォーテスによると、この二つの領域を分析上、区別することが、ラドクリフブラウン以降の親族研究理論における重要な進展であった [Fortes 2009(1969): 72]。前者は一般には、公的領域 (public domain) と呼ばれる。このフォーテスの議論に対しては、二つの領域を固定化して捉えている [清水 1987: 70, 138] とか、公的領域を男性の領域、家内的領域を女性の領域というようにジェンダーと結びつけて論じることが多いため、西洋的イデオロギーの産物であるとする批判 [Holy 1996: 69-70] も存在する。とはいえ、スンバ社会の理解のためには有効な議論であるので、以下、この区別に沿って議論を進めていこう。

スンバ社会で公的領域とは、土地所有・社会的地位 (階層)・儀礼 (祖先祭祀) に関する。具体的には父系氏族 (*kabihu*) と「家」(*uma*) という社会単位が重要である。氏族は、理念上、氏族の始祖 (*marapu*) の父系子孫から構成される親族集団であり、氏族の成員の間の内婚は厳格に禁止される。ただし、氏族の成員権については、生物学的父よりも母親のために婚資を支払った社会的父が重視されるというのが、スンバ社会の重要な特徴である。一方、「家」というのは、中核村 (*paraingu*) に建つ「マラブの家」(*uma marapu*) という家屋を儀礼の場としてもつ親族集団である。中核村とは政治的な領域 (これもスンバ語で *paraingu*) の中心となる集村である。スンバ島はオランダの植民地支配が確立する20世紀初頭以前には、自律性をもったいくつもの領域に分かれていた。これは、首長が率いるクニ (国) と呼べるような政治的単位であった。領域内に住んでいる父系氏族がそれぞれ祖先祭祀の場として「マラブの家」を中核村の内部にもっている。氏族が1棟の「マラブの家」しか持たない場合は、氏族と「家」が一致するし、一つの氏族が複数の「マラブの家」を持っている場合は、氏族が「家」という下位単位に分かれることになる⁸⁾。

家内的領域は生産・生計・生殖・養育に関する。この領域に関するスンバ語としては、*kalembi* と *kuru uma* という語を挙げることができる。*kalembi* は漠然と「家族」を指す語で、父系親族に限定しない、範囲があいまいな言葉である。一つの家屋に住む核家族を指すこともあれば、その姻族を含めて使うことがある。一方、*kuru uma* は「家の中」という意味で、家族というよりも世帯に近い概念である。このように、スンバ語では明確な教会をもった「家族」という概念は存在しないといえる。

スンバ語ではなく、インドネシア語の *keluarga* (家族) と *rumah tangga* (世帯) のほうが家内的領域にある社会単位を指す言葉として使われることが多い。*keluarga* は、さきほど説明したスンバ語の *kalembi* と多少似ていて、核家族から一つの団体の構成員全体 (その場

8) 中核村ウング (Parai Wunga) における氏族と「家」については、小池 [2005] を参照。

合は「大家族 *keluarga besar*」という語がしばしば使用される) までも指して使われる語である。しかし、KK (*kepala keluarga*), 直訳すれば「家族の長」という形で、夫婦と子を中心とする「核家族」を指して、行政や統計上で一般的に使われる。一方、住居と生計を共同する単位である世帯に対して *rumah tangga* (直訳すれば、「家の梯子」) が使われる⁹⁾。生計については「一つの台所から食べる」(*makan dari satu dapur*) という定義がインドネシアの統計調査で使用される。上記の二つの概念の関係は、一つの *rumah tangga* (世帯) が一つの KK から構成されるか (核家族型世帯), または複数の KK から構成される (たとえば直系家族型世帯) ことになる。一定の基準にもとづいて以前は KK 単位で貧困が認定され、援助の対象とみなされたが、現在の規則では世帯単位になっていて、「貧困世帯」(RTM=*Rumah Tangga Miskin*) という用語が使われる。

調査・分析の対象として家族というのは曖昧な概念であり、世帯のほうが適している。この点について、マレー農村を調査した立本は家族と世帯の区別を次のように論じている。「一定の構造をもつ家屋があり、そこで寝食をともにするという『規範』がある限り、世帯という集団を指摘するのは比較的容易である。…この世帯員の補充の母体となるのが『家族』である」[立本 2000: 199]。また、上で紹介したインドネシア語の家族と世帯の区別はマレー語と共通している。「私は現実の生活単位としての世帯と、結婚・出生・養取を基礎とする家族紐帯と、それらに基づいて当該社会で構築されている家族概念(理念型)との三つを明確に区別しようとしている。…幸いにマレー語の中に、家族(*クルアルガ*)と世帯(*ルマー・タンガ*)とを区別する語が明確にあるので、この立場が貫きやすいといえる。マレー語の家族は家族紐帯と家族概念とを同時に表現している」[立本 2000: 206]。

次に公的領域と家内的領域の関係を考えてみよう。実際には、状況によって二つの領域は複雑に絡みあい、単純に分離することができない。たとえば、貴族層の「家」(*uma*) の場合は、「家」の内部に多くの奴隷 (*ana kuru uma*, 「家の子」)¹⁰⁾ と親族員を抱え、大規模な「家の経済」(*Uma-economy*)¹¹⁾ を実践する。スンバでは、灌漑設備が整備されていない地域で、一部の貴族層の「家」が豊富な労働力と所有する水牛を使って、水田耕作を行っていた。このような場合、公的領域と家内的領域がかなり重なっていることになる。ただし、一般の村人は、稲作を行ってなく、トウモロコシなどの栽培が中心で、近隣との共同作業も含めて、世帯単位で農業に従事している。

筆者が最初にスンバを調査した1980年代後半の場合は、社会生活において公的領域の比率

9) この語は、日常でも使用される。インドネシア語の *berumah tangga* (世帯をもつ) は「結婚する」という意味である。

10) *ata* という奴隷を指すスンバ語があるが、日常的に使われることはない。その代わりに婉曲的な表現として *ana kuru uma* (家の子) が使用される。スンバでは奴隷層を含む階層制が多少は変容していても今日まで続いている。奴隷は主人が属する氏族の成員として数えられるが、氏族の祖先(マラブ)の正当な子孫とみなされることがない存在である [小池 2005: 53-55 参照]。

11) “*uma-ekonomi*” は、西スンバのラウオンダを調査したフェル [Vel 1994] が出した本の題名である。

が高く、ウンガの住民の多くは、これら二つの領域の双方に深く関与していた。しかし、近年キリスト教への改宗者が増加し（次章参照）、「マラブの家」を持たない、または「マラブの家」があっても、マラブ儀礼（祖先祭祀）に参加しない人が増えている。つまり、彼らにとって「家」が存在しないのである。このように祖先祭祀に関連する公的領域の相対的重要性が低下したが、婚姻と交換においては氏族という外婚単位の重要性は減っていない。氏族内の紐帯（「兄弟関係」）および氏族間の縁組関係（alliance）は依然としてスンバ人の社会生活において重要な役割を果たしている。一方、家内的領域については、世帯が生計単位として、その重要性を増している。とくに子どもの教育への投資は、スンバ社会全体の学歴水準の向上とともに、近年ますます世帯の家計に占める比率が高くなっている。この点は、世帯調査の結果の分析とともに、後でもう少し詳しく取り上げたい。

1-3 婚姻と交換

上で触れたスンバ社会を理解する上で不可欠な婚姻と交換について簡単に紹介したい。スンバでは、男性からみて母方交叉イトコとの結婚が理念的とされる。母方交叉イトコとは母の兄弟の娘のことである。しかし、実際に配偶者の範囲はもっと広く、たとえば母が生まれた親族集団（妻の与え手）に属する同世代の女性のように、系譜上の母方交叉イトコと同じ親族名称（ウンガでは *ana toya*）が使用される範囲の女性にまで拡大される。その反対に、自身の姉妹の結婚先である集団（妻の受け手）に属する女性との結婚は、厳しく禁止される。このような配偶者の選択に関する規則がある結果、集団間で一方的な女性の流れができることになる [小池 2005: 133-149 参照]。このような婚姻のシステムをレヴィ=ストロースは一般交換と呼び、基本構造¹²⁾の一つのタイプとした [レヴィ=ストロース 1997-1998 参照]。妻の与え手と妻の受け手の間の一方的な縁組関係が社会的に重要な絆を創り出すことになる。

スンバ人にとって、慣習に従い妻の受け手（夫側）と妻の与え手（妻側）の間で婚資の交換が行われ、初めて婚姻は正当なものとなる。また、婚資は婚姻の当事者である夫婦とその間に生まれた子どもの帰属に関係する。婚姻儀礼において、妻の受け手は馬（時には水牛か牛）と金属の装飾品を妻の与え手に贈り、それと交換に妻の与え手は、豚と布・織物を妻の受け手に贈るのである。妻の受け手が妻の与え手に贈るものを男財、妻の与え手が妻の受け手に贈るものを女財と呼ぶことにする。妻の受け手は結婚に必要な男財を集めるために、結婚する男性の属する世帯を中核として、その周囲に同じ氏族の成員、その男性の妻の受け手、さらに同村出身者、知人、政治家などが加わったアクション・グループを一時的に形成する。多くのケースでは、夫側の氏族がもつ慣習家屋（「マラブの家」とは限らない）で準備のための儀礼が執行される。

12) レヴィ=ストロースは「基本構造」を二者間で女性の直接的な交換を行う限定交換 ($A \rightleftharpoons B$) と三者以上の間で間接的な女性の交換を行う一般交換 ($A \rightarrow B \rightarrow C \dots$) の2つに分けた。

縁組関係にある二つの集団の間では、婚姻に関わらず様々な社会的な場で交換が繰り返される。その典型が死者儀礼である。葬儀に参列する集団は、個人との婚姻関係に応じて男財か女財を持って参列する。たとえば妻の親が死んだ時は、妻の受け手の親族集団は男財を用意して葬儀に臨まなくてはならない。婚姻に関わるアダット (adat, 慣習行事) への参加は、後に紹介する家計に占める儀礼関係の出費から明らかなように、スンバ人の世帯にとって大きな負担となっている。

2 世帯調査の概要

2-1 調査地

調査はインドネシアの東ヌサ・トゥンガラ州東スンバ県ハハル郡ウンガ村とカダハン村で実施された。この二つの村は1980年代はハハル分郡 (パンダワイ郡の一部) に属するウンガ村であり、ウンガ村が後にウンガ村とカダハン村に分かれた。ハハル分郡はハハル郡に昇格し、後に郡の東部がカナタン郡として分離し、現在のように7つの行政村から成るハハル郡ができた。

表1 ハハル郡とウンガ村の面積と人口 (1988年と2010年)

	ウンガ村		ハハル分郡
面積 (1988年) (km ²)	45.9		944.1
人口 (1988年)	1,031		7,976
行政単位変更後	カダハン村	ウンガ村	ハハル郡
面積 (2010年) (km ²)	23.5	22.4	601.5
人口 (2010年)	702	810	5,852

[Kantor Statistik Kab. Sumba Timur 1989; Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur 2011a, 2011b]

ウンガ村に、この地域の儀礼上の中心である中核村ウンガ (Parai Wunga) がある。中核村ウンガには1980年代後半の調査時には13棟の「マラブの家」が建っていた。しかし、2010年に火事があり、5棟が残っているだけである [小池 2011 参照]。上記のカダハン村とウンガ村の他にナプ村に存在する氏族が、「マラブの家」を中核村ウンガにもっていて、1980年代までは毎年、それぞれの「マラブの家」で収穫後と収穫前にマラブに対する祭祀を実施していた [小池 2005: 179-213 参照]。このようなマラブ祭祀では、各世帯がそれぞれ応分の負担を負って (米や供犠獣を持ち寄る)、「マラブの家」で祭祀を執り行っていた。マラブ祭祀に関して、当時は家内の領域が公的領域に取り込まれていたといえる。

ハハル郡は降水量が少なく、乾燥し、農耕が困難な土地が広がり、東スンバ県のなかでも経済的に後進地域とみなされている。カダハン村とウンガ村には水田はなく、トウモロコシなどの畑作と牧畜がおもな生業であり、また漁業が貴重な現金収入の手段となっている (詳細は次章参照)。カダハン村にはカダハン川が流れているが、ウンガ村には川がなく水の確

保が困難で、その結果、貧困問題がとくに深刻である。2009年において、133世帯中、119世帯が「貧困世帯」と認定され、援助の対象となった。

スンバ全体で、近代化の具体的な現われとしてキリスト教徒に改宗する住民が年々増加している。その結果、統計上1986年に東スンバ島の人口の37.6%を占めていた伝統宗教の信者（「その他の信仰」、一般にマラブ教と呼ばれる）は、2002年には17.5%になり、さらに2010年には12.0%にまで減っている [Kantor Statistik Kab. Sumba Timur 1987: 68; Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur 2003: 164, 2011a: 198]。伝統宗教がどの程度存続しているかは、スンバ島のなかでも地域によって異なる。2010年の時点で、カダハン村では村民の20.4%だが、ウンガ村では依然として78.4%に達している [Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur 2011b: 61]。キリスト教に改宗せず、マラブと答える村民が多いが、中核村でのマラブ祭祀は、1980年代と比較して明らかにすたれている。中核村ウンガの儀礼上の中心である慣習家屋「ラトゥの家」が朽ち果ててから長い年月が経っているが、その再建の動きは遅々として進んでいない [小池 2010a, 2011 参照]。これは明らかにマラブ祭祀の衰退を示すものである。各世帯がその手持ちの資源をマラブ祭祀ではなく、その成員のため、とくに子どもの教育に充てるようになったことが、その原因の一つとして考えられる。

表2 東スンバ島とハハル郡の宗教別人口（2010年）

	イスラム	カトリック	プロテスタント	ヒンドゥー／ 仏教	その他の信仰 (マラブ教)	合計
ハハル郡	56 1.0%	314 5.4%	2,795 47.8%	4 0.0%	2,683 45.8%	5,852 100%
東スンバ島	14,305 6.2%	19,630 8.5%	167,904 73.0%	487 0.2%	27,610 12.0%	229,936 100%

[Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur 2011a]

2-2 世帯調査の方法

東スンバの県庁所在地ワインガブにあるウィラ・ワチャナ・キリスト教高等経済学校 (STIE) のスタッフと協力し、2010年11月にカダハン村とウンガ村で世帯調査を実施した¹³⁾。カダハンにある10の隣組 (RT) から交通の便の悪い2つの隣組を除いて、8つの隣組を調査対象とした。また、ウンガ村では14の隣組すべてを調査対象とした。データの偏りがないように、各隣組からランダムに抽出した世帯 (各村50世帯で合計100世帯) の世帯主を対象として、質問票を使った調査を実施した。世帯主はカダハン村に女性の世帯主 (夫が死別か離別のため存在しないケース) が5人いるだけで、他は男性が世帯主になっている。質問票

13) 調査の実施に際しては、調査助手 (合計5人) とデータ入力助手 (2人) の選定など調査の全体に関し STIE の副学長 Umbu Ho Ara 氏の協力が得られた。また調査村ではカダハン村の村役人 Umbu Rawa Hawula 氏とウンガ村の村役人 Hina Ngunjumbani の協力があって調査が円滑に進んだ。この他、名前を一人一人挙げることはできないが、スンバでの調査に関わった関係諸氏に感謝の意を表したい。

はインドネシア語で作成され、必要に応じてスンバ人の調査助手がスンバ語で説明して世帯調査を進めた。

質問票は2部構成になっていて、第一部では、世帯構成員（他出者も含め）の年齢・出生地・結婚時の年齢・民族・宗教・氏族（*kabihu*）・職業・最終学歴などを問い、第二部では、住居（広さ・土地所有など）、農地の所有状況、収穫物、飼育する家畜、所有する電化製品（テレビ・携帯電話など）とバイク、農業以外の収入、項目ごとの支出額、緊急時に援助を求める方法など、各世帯の経済状況の概要を把握できるような質問票の作成に努めた。なお、今回の報告では、紙幅も限られているので調査項目のすべてを取り上げるのではなく、重要な項目に焦点を当てて結果を紹介したい。

3 世帯調査の結果

3-1 村民の概要

世帯主（合計100人）の民族構成についてみると、カダハン村にサブ人（*orang Sabu*）が1人いるだけで、他はすべてスンバ人（*orang Sumba*）と答えている。サブ人はもともとスンバ島の東部に位置するサブ島に住む民族集団で、オランダ統治時代にスンバ島に移住し、おもに県庁所在地ワインガプと東スンバ県の北岸地域にサブ人の集落がひろがっている。カダハン村はウンガ村とは違い、移住者が比較的多い村である。宗教についても調査対象者のなかに1人だけイスラム教徒がいる。この男性はワインガプ生まれで、妻とともにカダハンに移入してきた人である。また、調査対象者のなかに、同じハハル郡内のバタプフ村（*Desa Mbatapuhu*）から移住してきた住民が4世帯いる。バタプフ村は水の確保が困難で生活条件が厳しい村なので、村外へ移住する住民が多い。カダハン村は、定期市（2週間に1回）が開かれ、比較的に生活に便利なので、移住して来る人も多い。とくにワインガプからカダハンを経て西スンバ県まで通っている幹線道路沿いに他村から移住してきた人々が住んでいる。

表3 世帯主の民族集団と宗教

	スンバ人	サブ人	プロテスタント	カトリック	イスラム	マラブ教
カダハン村 (50人)	49	1	30	0	1	19
ウンガ村 (50人)	50	0	1	1	0	48
合計 (100人)	99	1	31	1	1	67

宗教についてみてみると、圧倒的にカダハン村のほうがプロテスタントに改宗している住民が多い。カダハン村には1980年代からプロテスタントのスンバ教会（*Gereja Kristen Sumba*）の牧師が常住する教会があり、布教が進んでいる。移入住民の割合とともに、ウン

ガ村と比べてカダハン村のほうが、より住民の構成が多様で「近代的」であることを示している。

3-2 経済状況

最初に住居の面から村民の経済状況についてみていこう。スンバでは「マラブの家」という儀礼的重要性をもち、慣習に従って建築された慣習家屋（インドネシア語で rumah adat）があるが、調査対象者のほとんどは慣習家屋ではない住居に住んでいる。住んでいる人の経済力を示す家屋の種類として、トタン屋根の家屋（rumah seng）と茅葺き屋根の家屋（rumah alang）がある。自生しているチガヤ¹⁴⁾を使った屋根のほうが地域の環境に適しているという見方もできるが、スンバ人にとってはトタン屋根のほうが住人の威信を示し価値が高い。カダハン村で両者の比率はほぼ半々なのに対して、ウンガ村で圧倒的に茅葺き屋根の家屋が多いという調査結果は、カダハン村のほうが経済的水準が高いことを示している。また、家屋の所有について持家でない家屋に住む世帯がカダハン村では3世帯だけ存在する。その内1世帯は、教会が所有する家屋に住んでいる。

世帯主の職業についてみると、2村合計で96人が農業で、その他のカダハン村の3人とウンガ村の1人は、小学校の非常勤講師など農業以外の職業に就いている。とはいえ、世帯主が農業以外の職業を回答していても、世帯としては99世帯が耕地を保有していて、農業に従事している。主な作物は、トウモロコシ・キャッサバ・ラッカセイなどである。カダハン村の農地の平均面積は1.10haで、ウンガ村の平均は0.93haである。保有する農地の面積については、両村でそれほど顕著な差はない。各世帯で保有する農地の面積については調査地全体で、0.2haから10haまで幅がある。2世帯が9haを越える広い農地を保有していると回答しているが、その土地が十分に耕作されている訳ではなく、たんに生垣で囲んで、土地に対する権利を主張しているだけである。調査地の村民は、保有する農地に関する土地証書（sertifikat tanah）をまだ得ていない。この二つの村では政府機関による土地の登記作業が始まったばかりである

スンバの農民は農業と牧畜が生業の中心であるが、表5にあるように副業として漁業に従事している村民は多い。世帯主の中でも半分に近い45人が海岸で獲った魚を売って現金を得ている。農地で収穫したトウモロコシとキャッサバはおもに世帯内で消費するため売ることではなく、漁業が住民にとって貴重な現金収入源になっている（詳細は次章）。

家畜の保有は、スンバ人にとって市場経済と縁組関係にもとづく交換の双方に関わる重要な意味をもっている。すでに説明したように、馬（ときには水牛も）は結婚にさいして妻の受け手が妻の与え手に贈るものであり、豚はその反対に妻の与え手が妻の受け手に贈る家畜である。また、豚はマラブ祭祀で犠牲獣として不可欠な家畜であり、儀礼的な重要性をもつ

14) 1980年代では村内にチガヤが豊富に自生していたが、今日ではカダハン村とウンガ村ではほとんど生えてなく、近隣の村からチガヤを購入するのが普通になっている。

表4 家屋の種類と広さ

	トタン屋根の家屋	茅葺き家屋	持家	その他	家屋の広さ(m ²)
カダハン村 (50世帯)	26	24	47	3	60,41
ウンガ村 (50世帯)	4	46	50	0	57,16
合計 (100世帯)	30	70	97	3	58.79

表5 職業と農地の保有(世帯主)

	農民 (人)	非常勤教師ほか (人)	耕地の保有 (人)	農地の保有面積 (ha)	副業としての漁業 (人)
カダハン村	47	3	49	平均 1.10 *1 最小 0.20 最大 9.38	16
ウンガ村	49	1	50	平均 0.93 最小 0.20 最大 10.00	29
合計	96	4	99	平均 1.01	45

*1: 農地面積が不明な一人を除いて集計(48人)

表6 家畜の平均保有頭数(世帯)

	馬	水牛	牛	豚	山羊	鶏
カダハン村	0.54	0.22	0.90	2.34	3.18	6.42
最少	0	0	0	0	0	0
最多	10	8	10	8	20	22
ウンガ村	0.54	0.02	1.28	3.18	1.80	9.50
最少	0	0	0	1	0	0
最多	4	1	6	17	10	46
平均	0.54	0.12	1.09	2.76	2.49	7.96

表7 消費財の所有(世帯単位)

	テレビ	ラジカセ	VCDプレイヤー	携帯電話	バイク
カダハン村	4	23	3	21	16
ウンガ村	0	20	0	20	6
合計(世帯数)	4	43	3	41	22

ている。儀礼では鶏もかならず必要とされるし、また客を迎えた時には鶏を食用に供する。上記の家畜に対して、牛と山羊はもっぱら必要な時に現金を獲得するために売られる家畜である。

調査対象の世帯では、鶏を平均8羽近く飼っていて、次に多いのは豚で、平均2.76頭である。豚を飼っていない世帯はカダハン村の7世帯だけである。一方、男性が結婚するのに不可欠な馬の頭数は近年、激減している。村人は馬の頭数が減少したことを地域の困窮化の一つの現れとしてしばしば言及する。実際にカダハン村の39世帯、ウंगा村の35世帯が馬を一頭も所有していない。また、水牛の飼育も一部の世帯に限られていて、水牛を飼っているのは全体で4世帯のみである¹⁵⁾。近年、政府の援助もあり、牛は49世帯が飼育している。

家畜の保有頭数は、市場経済と交換にもとづく経済（伝統的な経済）の双方に関わるものであったが、次に取り上げる消費財の所有（表7参照）は、純粋に貨幣経済の点で調査地の経済状況を計る指標となるものである。調査地では、まだ電気は普及してなく、乾電池を使用するラジカセ以外の電化製品の所有は発電機を所有する世帯に限定されている¹⁶⁾。すなわちカダハン村でテレビを所有する4世帯は、発電機も備えた裕福な世帯ということになる。当然VCDプレーヤー¹⁷⁾の所有も上記の4世帯のなかの3世帯である。ここで注目すべきことは、携帯電話を所有する世帯が調査地全体で41世帯（41%）もあるという事実である。もちろん携帯電話は、世帯単位で所有するというよりも、若い人を中心に個人単位で使用しているが、この表では世帯単位で普及の実態を示している。電気が整備されていないため充電が面倒で、かつウंगा村では携帯電話用の電波が届かない地域もあるが、半数近い世帯に携帯電話をもっている人がいるというのは、この地域も、近年著しいインドネシアの経済発展から取り残された地域ではないことを示している¹⁸⁾。それは、調査地ですでに22%に達しているバイクの所有率についても当てはまる。私が最初に調査した1980年代には、この地域で村と村を結ぶ交通・輸送手段として馬が重要性をもっていたが、政府による道路の整備が進んだことも相まって、バイクが村人の足として利用されるようになってきた。バイクを普段乗り回しているのは若い男性だが、求めに応じて息子が親をバイクで送り迎えするのは、よく見られる風景である。

15) 水田の耕作面積の広い西スンバでは、土地を耕すのに水牛を使用するため、東スンバより多くの水牛が飼育されている。

16) ウंगा村にある中核村ウंगाには、政府の援助により発電機が1台あり、中核村内の12棟の慣習家屋では電気照明が使用されている。また、カダハン村とウंगा村の一部の世帯には、政府の援助でソーラーパネルが設置されていて、太陽光発電による電気が照明に利用されている。

17) VCDはVideo CDの略で、DVDよりも技術的に前段階の動画記録媒体である。インドネシアでは映画を収めたVCDが海賊版も含めて数多く販売されている。

18) 比較の材料として、2007年に西ジャワ州カラワン県の農村で世帯調査した結果（対象は86世帯）の一部を紹介しよう【小池 2010b 参照】。この村は日系工業団地に隣接し、農村としては豊かな村である。34.0%の世帯が携帯電話を、そして59.3%の世帯がバイクを所有していた。スンバの携帯電話の所有率がカラワンよりも高いのは、たんに3年という調査時期の違いによるものなのか、または別の理由があるのかは明らかでない。

3-3 世帯構成

最初に世帯の平均構成員数をみると、カダハン村で6.58人、ウンガ村で6.50人で、両村で大きな差異はない。調査地域における世帯構成の特徴は、核家族・直系家族・複合家族¹⁹⁾という3類型に合わない、より複雑な構成を示す世帯が多いことである。そのため、表8では、上記の3類型に加えて、付帯成員の有無という基準を追加して世帯構成を分類している。付帯成員というのは、一般的に言えば上記の類型に含むことができない成員のことを指している²⁰⁾。「付帯成員あり」の核家族型（100世帯中19世帯）とは、たとえば親夫婦が、同居していない既婚の娘の娘、つまり孫娘を養っている世帯（世帯番号 141）である。このような子どもの引き取りは、その子どもが相続の権利をもつような養取（adoption）ではなく、一時的な「里子慣行」（fostering）と呼べるものである。付帯成員は、直系家族型と複合家族型の世帯にも存在する。世帯主よりも下位の世代の親族が同居している世帯が多いが、世帯主と同じ世代や上位世代が付帯成員として世帯に加わっているケースも存在する。たとえば、直系家族型世帯に、世帯主の兄（74歳）が加わっている世帯²¹⁾（世帯番号 218）などがある。

表8 カダハン村とウンガ村の世帯構成

		核家族型	直系家族型	複合家族型	小計
付帯成員なし	カダハン村	16	10	8	34
	ウンガ村	19	10	3	32
	小計	35	20	11	66
付帯成員あり	カダハン村	8	6	2	16
	ウンガ村	11	6	1	18
	小計	19	12	3	34
小計	カダハン村	24	16	10	50
	ウンガ村	30	16	4	50
合計		54	32	14	100

付帯成員の有無を問題にしないで、調査地全体の世帯構成を単純化して3つの類型に分けると、核家族型が54世帯、直系家族型が32世帯、複合家族型が14世帯になり、核家族型がもっとも多くなっている。とはいえ、核家族を志向する家族イデオロギーがスンバ社会にあるわけではない。親と同居しない子どもが核家族型の世帯を形成し、一組の夫婦の子どもの数が

19) 直系家族は、日本のイエのように、一世代一夫婦の原則で核家族が縦に結合している家族類型である。直系家族に分類できない、複数の核家族が結合している家族を本稿では複合家族と呼んでいる。たとえば、兄夫婦と弟夫婦が親とともに一つの世帯を構成していれば、それは複合家族型世帯になる。合同家族（joint family）という類型は使わない。

20) スンバの家族における付帯成員については、別稿で詳細に論じる予定であり、ここでは概略に触れるだけにする。

21) このように妻を喪った高齢の兄を引き取って一緒に暮らしている世帯は、「付帯成員あり」とみなす。一方、未婚のまま親元に残り、親の死後も世帯主となった兄弟とともに暮らす男性がいれば、付帯成員とは考えずに、直系家族の一員と考える。付帯成員とみなすかどうかの判断は、系譜関係だけで決まるわけではない。

多いため、核家族型がもっと多くなっていると考えられる。さらに直系家族型について調べてみると、32世帯（「付帯成員あり」も含む）のなかで、3世代または4世代が父系でつながっているのが22世帯、それ以外の系譜関係でつながっている構成員を含むのが10世帯（世帯主と娘夫婦の同居や、妻方の親との同居など）である。この集計結果から、息子のなかの一人が親夫婦と同居して父系の直系家族を形成し、それ以外の男子が核家族型世帯を形成するというパターンが比較的が多いことは分かる。とはいえ、氏族の構成規則である父系出自が世帯の構成をそのまま決定しているわけではない。さらに核家族型にも直系家族型にも含まれないような複雑な構成をもった世帯が、ウンガ村では4世帯だけだが、カダハン村に10世帯も存在する。このなかには、世帯主とはまったく親族関係のない構成員²²⁾とその子どもも加わって、合計19人という大きな世帯を形成しているケース（世帯番号 247）がある。付帯成員が存在する世帯が34世帯もあるという調査結果も合わせて考えれば、世帯の融通性の高さが調査地の特徴といえる。

調査対象世帯の圧倒的多数は、一つの住居に一世帯が住んでいるケースであるが、そうではない例外的な世帯も存在する。カダハン村の複合家族型世帯（世帯番号 235）と核家族型世帯（世帯番号 243）は一つの住居に居住している。前者は、中心となる世帯主夫婦が高齢のオジ（父親の弟）夫婦を引取っていて、一方、後者は、前述の世帯主の父方の祖父の異母兄弟とその妻から成る世帯である（子どもは成長して、すべて他出している）。インドネシア語のKK（核家族）を使えば、一つの住居に3つのKKが住み、それが二つの世帯（rumah tangga）にまとまっていることになる。二つの世帯が別々に料理を食べ（別食）、家計を分けているので、たとえ一つの住居に住んでいても、インドネシアの基準では世帯は別とみなされている。

4 家 計 調 査

4-1 家計調査の方法

各世帯の家計を明らかにするためには、本来は収入と支出の両面からアプローチする必要がある。しかし、収入、とくに農業収入を正確に捕捉するのが困難なため²³⁾、項目ごとに毎月の平均支出を聞きだし、各世帯の家計の概況に迫ることにした。毎月の支出額を聞くためには、調査対象期間の直後に調査を実施して、前月の支出を聞く方法があるが〔御船ほか 2007: 146〕、スンバでは雨季と乾季の違い、また儀礼に参加した月とそうでない月の違いなどが大きいので、一年間を念頭に置き、毎月どの程度の支出をするのか、月平均の支出を尋ねる方法を取った。もちろん支出額に関し厳密さに欠ける方法ではあるが、とりあえず支出の全体像を大まかに把握するためには、この質問方法で十分だと考えた。なお、インド

22) 世帯主は親族だと答えているが、実際はスンバ社会に存在した奴隷の子孫である。

23) 西スンバのラウォンダで調査したフェルも現金だけでなく農産物も含めた世帯の全収入を捕捉することの困難を指摘している〔Vel 1994: 148-149〕。

ネシアの通貨ルピアは、レートの変動はあるが、調査時で100ルピアがおよそ1円であった。

4-2 家計調査の結果

最初に表9の区分について説明しよう²⁴⁾。消費支出とは表10でその内訳が明らかになるように、食料品から教育・教養娯楽まで含む支出であり、カダハン村とウンガ村とともに全支出の4分の3以上を占めている。非消費支出とは、日本でいえば直接税と社会保険料を含む項目である。スンバの村民はとくに払うべき社会保険料がないので、ここでは税金のみを指している。税といっても村民は所得税を払っていないので、ここで問題になるのは土地に対する税金だけである。ただし、行政側が個々の世帯の農地保有をまだ十分に把握していないので、地税を払っているのは少数の世帯だけである²⁵⁾。「実支出以外の支出」とは、貯金と借金返済を指している。まだ銀行に口座を開いて貯蓄するというのがごく少数の村民に限定されているので、ここでは借金返済のほうが高い割合を占めている。最後の「経営支出」とは、牧畜も含めて農業経営（世帯によっては漁業も）に必要な諸経費を指している。調査対象の世帯は「農家」であり、消費主体であると同時に経営主体でもある。ただし水田耕作ではなく、粗放なトウモロコシなどの畑作が中心なので、肥料・農薬などの経費はほとんど使っていない。

表9 一世帯あたりの平均支出（ルピア）

	消費支出	非消費支出 (税)	実支出以外 の支出	経営支出	合 計
カダハン村	913,975	22,498	90,601	130,790	1,157,864
%	78.9	1.9	7.8	11.3	100.0
ウンガ村	853,585	1,600	66,954	195,523	1,117,662
%	76.4	0.0	6.0	17.5	100.0
2村の平均	883,780	12,049	78,778	163,157	1,137,763
%	77.7	1.1	6.9	14.3	100.0

表10 一世帯あたりの品目別消費支出（ルピア）

	食料	光熱・ 水道	被服及 び履物	保 険 医 療	交通・ 通 信	教 育	教 養 娯 楽	その他	合 計
カダハン村	351,515	52,770	98,882	10,438	115,770	66,675	11,963	205,962	913,975
%	38.5	5.8	10.8	1.1	12.7	7.3	1.3	22.5	100.0
ウンガ村	435,105	23,350	68,111	9,358	61,982	88,432	0	167,247	853,585
%	51.0	2.7	8.0	1.1	7.3	10.4	0	19.6	100.0
2村の平均	393,310	38,060	83,497	9,898	88,876	77,554	5,982	186,605	883,780
%	44.5	4.3	9.4	1.1	10.1	8.8	0.7	21.1	100.0

24) 支出の区分については、御船ほか [2007] を参考にしている。

25) のちに正式に土地の登記をする際、地税を払っていることはその土地に対する権利を示す重要な証拠となる。

表11 「その他」の内訳（ルピア）

	石鹼類	タバコ	シリ・ピナン	儀礼関連	その他	合計
カダハン村	25,950	51,930	21,740	99,145	7,197	205,962
ウンガ村	23,490	30,140	19,360	89,737	4,520	167,247
2村の平均	24,720	41,035	20,550	94,441	5,859	186,605

消費支出は一般に日本では10品目に分類されているが〔御船ほか 2007: 10-20〕, 表10では, そのなかで「住居」と「家具・家事用品」を除いて, 8品目に分けている。すでに取り上げたように, 家賃と地代を払っている世帯はなく, また電気冷蔵庫のような家事用耐久財やタンスなどの家具を所有していないので, 調査ではこの二つの項目を削除して, 8品目を表に載せている。

「食料」は, 炭水化物（米・トウモロコシ・イモ類）, 野菜類, 肉類（魚類と卵を含む）, 豆類, コーヒー豆と砂糖, 食用油という6つの品目の合計である。これらの食料品のなかで, 米, コーヒー豆と砂糖（茶葉も含む）, および食用油は, おもに市場で購入するもので, それ以外はおもに自らの農地で収穫したものである。これらの農作物は, 世帯ごとの1ヵ月平均の消費量に市場価格をかけて, それぞれの支出額を算出した。調査対象の世帯は農家なので, 支出といっても, かならずしも現金を払って購入したという意味ではない。「食料」の支出のなかのもっとも, 比率が高いのが米とトウモロコシなどから成る炭水化物である（食料全体の, カダハン村で68.0%, ウンガ村で80.1%）。経済的に裕福な世帯では米を主食とするが, 貧しい世帯では米にトウモロコシを混ぜて炊いたご飯を食べている。仮に米だけ食べるとすると, 米の消費量は世帯の構成員数によって異なるが, およそ1食で1kgである。市場での米の標準的な価格は1kgで6,000ルピアであるから, 1日に2回の食事をとるとすると, 1ヵ月の消費量は60kg, すなわち36万ルピアかかることになる²⁶⁾。炭水化物の次に支出が多いのが, コーヒー豆と砂糖である（食料全体の, カダハン村で13.1%, ウンガ村で11.0%）。2週間に一度, カダハン村で開かれる定期市（*paranggangu*）²⁷⁾で, 多くの村人がコーヒー豆と砂糖などを購入する。

「光熱・水道」には, 燃料油, 飲料水と電気のための費用が含まれるが, とくに高い割合を示していない。ウンガ村には水道設備がまだないが, 地区ごとにある貯水槽に水を運ぶための給水車の費用を各世帯が負担している。「被服および履物」は, 村人にとって必需品の一つで, 東スンバ島の県庁所在地ワインガブにある店や定期市で購入する。「保険医療」は, 医者や保健所などに通う際の医療費である。「交通・通信」は, おもに村からワインガブへ

26) 貧困世帯に対して政府は「貧困米」（*raskin=beras miskin*）という援助米を配給している。2ヵ月ごとに貧困世帯に対して30kgの米を1kg当たり1,200ルピア（市場価格の5分の1）という安い価格で販売している。各世帯の支出を調べる時, 「貧困米」の購入額についても計算すべきであったが, それは考慮していなかった。

27) *paranggangu* というのは「多くの人が出会う所」という意味である。

の行き帰りに使うバス代、バイクのガソリン代、そして携帯電話の費用を含む。当然、バイクを所有している世帯では、ガソリン代の負担が大きくなる。「教育」は世帯ごとで偏差の大きい項目である。島外の大学に子どもを送り出している世帯にとっては高額になるし（最高で約86万ルピア）、小学生の場合は負担が小さく、さらに就学期の子どもがいない世帯はもちろん支出がゼロになる。「教養娯楽」は、書籍・雑誌を購入する習慣がなく、娯楽設備のない村落部では、ほとんど意味のない項目である。

消費支出のなかの「その他」には、インドネシアの他の地域とは異なるスンバの独自性が現れているので、その内訳を表11で示している。「石鹼類」には、石鹼とシャンプーが含まれる。「タバコ」は市販の紙巻タバコとタバコの葉を含む。中年以上の村人には、タバコを吸うだけでなく、噛みタバコを好む人がいる。「シリ・ピナン」はスンバ人にとって欠かせない嗜好品である。シリ（キンマの実）とピナン（ピンロウジュの実）、さらに石灰を口に入れて噛むのである。「儀礼関連」はスンバ人にとって大きな意味を有する項目である。2村の平均額94,441ルピアは、消費支出全体の10.7%を占めている。世帯ごとの偏差も大きく、最高は910,000ルピア（カダハン村）で、最低はゼロの世帯もいる。このなかには、息子の結婚に必要な馬や金属の装飾品だけでなく、死者儀礼に参列する時に持参する交換財（その中味は妻の与え手か妻の受け手かに応じて異なる）、さらには儀礼を執行するための諸経費が含まれる。貧困に苦しむ世帯であっても、地域社会で社会生活を送る上で、儀礼に関連する支出は不可欠なものである。最後の「その他」には、上記の項目に含まれない品目が含まれるが、金額としては小さなものである。

4-3 家計調査からみえてくるスンバ経済

この家計調査の結果から、調査前の想定を超えて各世帯が現金を使っていることが明らかになった。この支出額のなかには、自ら収穫した農作物から算出した金額も含まれているが、一世帯当たり平均して110万ルピア（約11,000円）を超える支出額は、予想よりも多い金額であった。しかし、世界銀行の定義をもとにした、4人家族でひと月の支出が約150万ルピア（約15000円）をインドネシアの「中間層」の下限とする基準 [佐藤 2011: 41-45] に照らしてみれば、もちろん「中間層」にはまったく及ばない額である。月当りの平均支出を平均世帯員数である6.54人で、さらに30日で割り、1日一人あたりの支出を算出すると5,799ルピアになる。これは1ドルに満たない支出であり、インドネシアにおける「貧困層」（1日一人あたりの支出が1.25ドル未満）に含まれることとなる。

問題は、各世帯が毎月費やしている現金をどのように獲得しているかということである。すでに述べたように収入の捕捉が困難なため²⁸⁾、比較的聞きやすい支出の点から家計の概要に迫って行こうというのが、今回実施した世帯単位の家計調査であった。とはいえ、収入に

28) 各世帯の収穫物のなかの自家消費分と売却分の割合および売却金額に関する調査は実施していない。

についての質問項目もあるので、その回答から明らかになる限りで調査地の現金獲得の手段について述べたい。収穫物のなかでトウモロコシとキャッサバはおもに自家消費のためであるが、ラッカセイは定期市やワインガプの市場で売って現金を得ている。

農業よりも現金獲得の手段として大きな意味をもつのが漁業である。前章の表5で説明したように、世帯主についていえば、カダハン村の16人とウンガ村の29人が副業として漁業に従事していると回答している。世帯主の他にも、息子が漁業に関わっている世帯は多い。ここでは、カダハン村のひとつの世帯（世帯番号 223）を取り上げ、漁業から得ている月ごとの収入をみてみよう。漁業で180万ルピア、さらに塩作りで90万ルピアの収入を得ている。ただし、合計で96万ルピアの経費がかかっているため、純益は174万ルピアになる。一般的にあって、これはインドネシアの工場労働者の月収を上回る額であり、調査地の基準でいえば裕福な世帯といえる。世帯主の男性（58歳）の職業はプロテスタントの「伝道師」（Guru Injil）^{29）}であって、この世帯は調査対象の世帯のなかでも特異な存在である。これは6人から成る直系家族型世帯である。一番下の娘は高校に通うため、ワインガプに住んでいる。世帯主は二男（24歳）と協力して漁業で上記のような収入を得ている。一方、妻（49歳）は4男（19歳、既婚者）とともに塩作りに携わっている。漁業による収入が大きいですが、妻と息子たちの職業は「農民」（tani）であり、0.5haの畑からトウモロコシとラッカセイを収穫している。子どもは合計8人で、その内、2人（32歳の三女と28歳の長男）がバリへ働きに出ている。世帯主に聞いてもこの2人がどこで何をしているか知らず、バリにいる子どもが定期的な送金をしているわけではない。

調査地において、漁業とともに現金収入源として大きな意味をもつのが牧畜である。ただし、定期的に家畜を売って生計に充てるといった牧畜業を営んでいるのではなく、子どもの教育（とくに島外の大学への進学）や、治療費や儀礼の執行など大きな出費を必要とする時に、保有する家畜を売って現金を手にするのが一般的である。このことはラウォンダで調査したフェルも指摘している [Vel 1994: 151-152]。家畜は、スンバ人にとって「動く財布」ともいえる存在である。家畜がもつ経済的意味は、次章で具体的に明らかになる。

5 ケース・スタディからみる生存戦略

これまでカダハン村とウンガ村の世帯調査の結果にもとづき、調査地の世帯と生計の概要を描いてきた。この章では、ウンガ村の一つの世帯（世帯番号 108）に焦点を当てて、その生計の内容を検討した上で、どのようにして子どもの進学という重要時に教育費を捻出したのかという生存戦略を考えていきたい。各世帯の経済力によって異なるが、自分たちとは違い、子どもには可能な限り高い学歴を身に付けさせたいというのが、スンバ社会でも多くの親の願いとなっている。学校教師と公務員が、農村に住むスンバ人にとって手が届く、ほぼ

29) 「伝道師」は、教会組織では牧師の下に位置し、教会を持たずに村で伝道活動に携わっている聖職者のことである。

唯一の収入が安定した職業である。そのためには高等教育への進学が不可欠になる。

この世帯は、9人から成り、付帯成員を一人含む核家族型世帯である。世帯主は39歳（小学校卒）で、妻は40歳（小学校を卒業していない）で、子どもは6人いる。長男は21歳で現在、クパン³⁰⁾のキリスト教系私立大学で体育教師になるための勉強をしている。18歳の長女と14歳の二女はワインガブに住み、高校に通っている。三女は7歳で自宅から小学校に通い、その他、5歳の二男と2歳の三男が家にいる。また、妻の姪（妹の娘）を小さい時から養育している³¹⁾。

この世帯は、0.8 haの畑を保有し、毎年、およそトウモロコシ250kg、ラッカセイ20kg、キャッサバ50kg、緑豆10kg、モロコシの一種50kg、ウリ類500個を収穫する。もちろん、農業だけでは後で述べる教育費も含めて世帯を支えることができないので、漁業で毎月約50~60万ルピア（不漁の場合は、この額に達しない）の現金収入を得ている。獲った魚を干し魚にしてから市場で売っている。

子どもの教育費について、詳細をみていこう。長男がクパンの大学への進学を強く希望したので、「助けを求める」(*karai pandulangu*)³²⁾という儀礼を主催して、クパンへ出発する費用を集めた。これは、資金を集めるために知人・親族などを招いて開催する儀礼である。参加者は各自5万から20万ルピアを持参する。この時は、合計約400万ルピアが集まったが、出席者に振る舞う食事代（とくに豚1頭）が約300万ルピアかかったので、主催者の手に残ったのは、わずか100万ルピア程度であった³³⁾。集まった金額だけでは不十分なので、父親は、息子がクパンに出発する時、成長した牛を500万ルピアで、馬を150万ルピアで売った。また、もう1頭の馬も手放し、今は馬も牛も残っていない。出発の時に総額2000万ルピアが必要であったが、集めた金額はその半分程度にしかならず、残りは借金して何とか工面した。

クパンでは、長男は以前ウンガに駐在していた灯台職員（父親と親族関係がないサブ人）の元に住んでいて、とくに下宿代は払っていない。長男の学費は、大学の授業料（年間約400万ルピア）も含めて、1ヵ月平均で約100万ルピアかかる。毎月送金しているのではなく、現金がある時に送っている。一方、ワインガブに住む長女と次女は、それぞれ別の知り合いの元にて高校に通っている。二人の学費として、学校へ納付するのは一人年間100万ルピアで、その他に毎月約20万ルピアが必要となる。

ここで紹介した聞き取りの結果から明らかになるのは、世帯が稼ぎ出すことができる収入を

30) クパン (Kupang) はティモール島の西端にあり、東ヌサ・トゥンガラ州の州都である。

31) 2011年8月30日に再調査した時には、近所の実の親の元に戻っていた。ただし、時々、家に来るといふ。

32) インドネシア語では *kumpul tangan* (手を集める) という表現がある。スンバ人だけでなく、サブ人、ジャワ人など多様な民族集団が住むワインガブでは、この表現が一般的に使われ、教育費だけでなく婚資のための援助を求める儀礼が開催される。

33) 参加者へ振る舞う食事に多額の費用を要するのは無駄だという、村長からの指導があり、2011年から飲み物（コーヒーか茶）を用意するだけの簡素な儀礼に変わった。いずれにせよ、これは互酬性が生きている相互扶助慣行である。援助をもらったら、その与え手がこの種の儀礼を主催する時には、かならず現金を用意して参加しなくてはいけない。

はるかに超える金額を教育費に充てようと努める親の姿である。上では触れていないが、世帯主の兄弟を含む親族からの援助と借金があって、ようやく一人の息子を島外の大学へ、そして二人の娘をワインガプの高校に進学させることが可能になった。また、「助けを求める」という儀礼は、伝統的なスンバ社会における縁組関係に限定された連帯の在り方ではなく、村落社会における、より幅広い人々を巻き込んだ互酬的關係が、進学という近代的な現象に対応して、スンバの農村部において重要な意味をもっていることを示している。最後に、この世帯主は、知人というネットワークを使い、下宿代を伴わない形で子どもを寄宿させている。もちろん寄宿先で当の子どもは様々な家の雑用をすることになるが、このケースに限らず、経済的に裕福でない世帯の子どもが村外の学校に進学するために親族や知人を頼るのは、よく使われる手段である。以上のように、親族関係、近隣関係、そして友人関係という多様なネットワークを必要に応じて使って、子どもを進学させようとする世帯主の生存戦略が、このケース・スタディから如実に浮かび上がってくる。

お わ り に

本稿では、東スンバ島のカダハン村とウンガ村における家計調査の概要を紹介した上で、ケース・スタディとして子どもの進学という重要時にさいして、世帯主がどのようにして必要となる現金を工面しようとしたかという生存戦略を明らかにした。このケースでは、世帯主が主要な稼ぎ手で、子どもは親から全面的な経済援助を受ける立場であり、その点で世帯の一体性を議論の前提とすることができた。とはいえ、世帯の生存戦略という概念がすべての世帯に適用できるわけではないことに注意する必要がある。

4章で漁業収入の占める重要性を紹介するためにカダハン村の一つの世帯(世帯番号 223)を取り上げたが、この世帯で家計の一体性がどの程度いえるか実は明らかでない。世帯主の妻と子どもが共同の家計のために全面的に貢献しているかのように記述しているが、それぞれが稼いだ収入をどの程度、自分の財布に入れているかは、この調査方法からは知ることができないのである。筆者の調査地での経験でも、世帯主以外の成人男性と女性もそれぞれ自分の財布をもち、定期市などで自分の裁量で現金を使っている場面をよく見ている。家族社会学者の久保田は、「互いの利害を超えて協力しあい、個人の収入や労力のすべてを共同するという想定を、『家計の共同』における一体性の想定」[久保田 2012: 35]と呼び、世帯概念からこのような想定を排除することを主張するが、これはスンバ農村における家族・世帯・家計の研究でも耳を傾けるべき提言である。

家計の一体性という問題は、親夫婦と子夫婦が一つの世帯を形成している場合には、もっと複雑な様相を呈するようになる。日本の民俗社会におけるイエとは異なり、スンバの世帯構成は固定的ではない。スンバでは世帯構成は状況に応じて変わりうるものであり、夫婦が雨季の農繁期と乾季の農閑期では異なる住居で暮らすケースもしばしばある³⁴⁾。本稿は、スンバ農村における世帯と家計という難しいテーマのやっと思緒を開いただけであり、その先

にはもっと複雑な家計という問題が存在している。その解決のためには、一つの世帯の家計を、それを構成する夫婦単位および個人単位の収入と支出の捕捉だけでなく、それを含みこむ上位の親族組織（公的領域）との関係も含めて、長いスパンで把握できるような調査法が必要となってくる。スンバ農村における家計というブラック・ボックスを開こうとすると、そこには数多くの課題が見えてくるのである。

参 考 文 献

- Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur, 2003, *Sumba Timur dalam Angka 2002*, Waingapu: Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur.
- Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur, 2011a, *Sumba Timur dalam Angka 2011*, Waingapu: Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur.
- Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur, 2011b, *Haharu dalam Angka 2011*, Waingapu: Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur.
- ブルデュ, P., 1988, 『実践感覚1』(今村仁司・港道隆訳) みすず書房。
- Fortes, M., 2009 (1969), *Kinship and the Social Order: the Legacy of Lewis Hnery Morgan*, New Brunswick: Aldine Transaction.
- Fox, J. J., (ed.), 1980, *The Flow of Life: Essays on Eastern Indonesia*, Cambridge: Harvard University Press
- Holy, L., 1996, *Anthropological Perspectives on Kinship*, London: Pluto Press.
- Kantor Statistik Kab. Sumba Timur, 1987, *Sumba Timur dalam Angka 1986*, Waingapu: Kantor Statistik Kab. Sumba Timur.
- Kantor Statistik Kab. Sumba Timur, 1989, *Sumba Timur dalam Angka 1988*, Waingapu: Kantor Statistik Kab. Sumba Timur.
- 小池誠, 1989, 「イエとムラ——インドネシア・東スンバ社会におけるイデオロギーと現実」『民族学研究』54-2: 137-165。
- , 1990a, 「中核村ウンガの「大祭」をめぐる——1986年, インドネシア・東スンバ」『アジア・アフリカ言語文化研究』39: 135-161。
- , 1990b, 「二元主権論再考: インドネシア・東スンバの聖と俗」『南方文化』11: 53-71。
- , 1993, 「東インドネシアの家」須藤・秋道・崎山編『オセアニア② 伝統に生きる』東京大学出版会。
- , 1998, 「東インドネシアの「家」と縁組」『社会と象徴——人類学的アプローチ(村武精一先生古稀記念論文集)』岩田書院。
- , 2003, 「ジャワ村落社会のテレビ視聴者——メディア人類学の試み」『国際文化論集』27: 23-52。
- , 2005, 『東インドネシアの家社会——スンバの親族と儀礼』晃洋書房。
- , 2009, 「東インドネシアにおける家と婚姻戦略」國方敬司・永野由紀子・長谷部弘編『家の存続戦略と婚姻——日本・アジア・ヨーロッパ』刀水書房。
- , 2010a, 「スンバで家を建てること——インドネシアとの文化的交流を深めるためのプロジェクト報告(1)」『桃山学院大学総合研究所紀要』36-1: 195-211。

34) フェルは、ラウオンダの調査地において乾季には姉夫婦が弟夫婦とともに父の家屋で共同で暮らし、雨季には姉夫婦がその家屋を出て畑の近くの住居で独自の生計をもって暮らすというケースを描いている [Vel 1994: 120-122]。フェルは、姉と弟がそれぞれ別の世帯を形成し、その二つの世帯が合わさって一つの「家の経済」(Uma-economy)を構成していると述べている。

- , 2010b, 「インドネシア・カラワンにおける日系工業団地進出と周辺農村社会に生きる家族の変容」『南方文化』37: 45-59。
- , 2011, 「スンバで家を建てること——インドネシアとの文化的交流を深めるためのプロジェクト報告(2)」『桃山学院大学総合研究所紀要』37-1: 93-108。
- 久保田裕之, 2012, 「世帯概念の再編——非家族世帯と『家計の共同』をめぐって」『年報人間科学』33: 27-42。
- Kurosaki, T., 1998, *Risk and Household Behavior in Pakistan's Agriculture*, Tokyo: Institute of Developing Economies.
- レヴィ=ストロース, 1977-1978, 『親族の基本構造 上・下』(馬淵東一ほか訳), 番町書房。
- 御船美智子ほか, 2007, 『家計研究へのアプローチ——家計調査の理論と方法』ミネルヴァ書房。
- 宮内泰介, 2011, 『開発と生活戦略の民族誌——ソロモン諸島アノケロ村の自然・移住・紛争』新曜社。
- 佐藤百合, 2011, 『経済大国インドネシア——21世紀の成長条件』中公新書。
- 清水昭俊, 1987, 『家・身体・社会』弘文堂。
- 立本成文, 2000, 『家族圏と地域研究』京都大学学術出版会。
- Vel, J., 1994, *The Uma-ekonomy: Indigenous Economics and Development Work in Lawonda, Sumba (Eastern-Indonesia)*. Ph D thesis, Wageningen: Agricultural University.

(2012年5月7日受理)

An Anthropological Study of Households and their Economics on the Island of Sumba, Indonesia

KOIKE Makoto

The aim of this paper is to report some results of the research project titled “An Anthropological Study of Kinship and Family in Changing Rural Societies in Indonesia,” which was funded by the Research Institute of St. Andrew’s University. The field work was carried out from November to December 2010 in two villages, Kadahang and Wunga, of the Regency of East Sumba, in the Province of Nusa Tenggara Timur, in order to acquire sociocultural and economic data of one hundred households. The data were analyzed to elucidate the household economics of the Sumbanese villagers, a topic seldom studied by previous anthropologists, and to understand how the villagers employ survival strategies to overcome some critical problems occurring among the changing local societies.

The results of the research on household economics show that the monthly average of the total expenditure per household was over IDR 1,100,000 (at the time about JPY 11,000), which is more than was assumed beforehand since East Sumba is known to have much poverty. It should be considered how the households get money to pay for educational expenses for their children and everyday commodities excluding agricultural products. Although household heads identify themselves as “farmers” (*tani* in Indonesian), income from fishing comprises a significant part of their total cash income. Also, livestock such as horses and pigs can be sold to cover the large costs of higher education or hospital treatment.

This paper focuses on one household as a case study to explore how its head is able to cover large expenditures for the son’s entering university located outside the island of Sumba and the two daughters’ attending high schools in the town of Waingapu. Nowadays, most parents hope their children attain higher education so that they can work as government officials or teachers. To cover the high costs of education, the household head sold his livestock and held a ritual called “asking for help” (*karai pandulangu*) to collect money from friends as well as his neighbors and relatives. Because the children lodge with the father’s acquaintances without charge, he can save on the educational costs. He fully utilizes his own resources including his social networks so that his children can acquire a higher educational background. This is an example of the survival strategies that villagers often employ for the welfare of the households.